

# 作文力を高める指導と作文ソフトの研究

—情報化社会を生きるコミュニケーション力を育てるために—

株式会社ジャストシステム  
小学校5年・国語・総合  
岡山市立津島小学校  
三宅 貴久子  
ほか研究メンバー

キーワード 小学校, 5年, 国語, 作文, 研究, コミュニケーション, 書く力, ひらめきライター, ジャストスマイル

## 研究のねらい

教育の情報化により、コミュニケーション機会は増大したが、その「質」はどうか。本研究では、コンピュータによる支援が産出作文にどのような影響を与えるのか、という問題を中心に、コンピュータを利用した作文が書き手の情意面に与える影響をさぐる。

さらに単に語彙や文の構成だけでなく、文章表現を媒介として行われるコミュニケーション全体にも注目し、その相互作用について着目・分析していくことで、情報社会を生きる子どもたちが身につけるコミュニケーション能力の一端を明らかにしたい。

## 1. 研究動機

### (1) 教育の情報化と書く力

教育の情報化がもたらすものに、コミュニケーション機会の増大がある。つまりこれまで以上に話す、聞く、読む、書くの能力が求められるわけである。それにはまず、書く力が重要であると考えた。しかしながら、コンピュータを利用した授業の実践報告は数多く行われているものの、コンピュータによる支援が産出作文にどのような影響を与えるのかということは、あまり明らかにされていない。

### (2) コミュニケーション能力と書く力

しかし、単に書かれた文の語彙や構成だけでは、書く力を十分に明らかにできない。文章表現を媒介として行われるコミュニケーション全体が文章に与える影響も少なくないと考えられるからだ。そこで、子どもたちの作文活動を1年間記録し、その文を分析しながら、できるだけ授業風景も記録・分析していく。これにより、情報社会を生きる子どもたちに身につけるコミュニケーション能力というもの的一端を明らかにしたいと考えた。

## 2. 研究計画と調査手法

### (1) 研究計画と活動

日程	研究計画	作文授業	内容	
04年	3月	研究会①	津島小学校あいさつ。研究意識・目的のすりあわせなど。	
	4月		パソコンについて 研究開始前の子どもの実態を見るため、パソコンの良い点、悪い点をテーマに作文を書く。全員手書きの作文。	
	5月	研究会②		研究メンバーにて指導計画・調査計画を検討。また準備指導で書かせた作文を分析し、研究前の学級の実態を知る。
		授業見学会① 研究会③	言葉について考え	授業見学と記録。ひらめきライター使用。授業後、授業の検討と指導計画の確認、調査手法などを話し合う。
	7月		自動車工場の見学	自動車工場に見学に行ったときのことを、作文に書く。ひらめきライターを使うか、手書きで書くかは個人の自由。
	8月	研究会④		1学期の作文活動を振り返り、成果と問題点を洗い出す。2学期以降の実践および研究の方法を具体的に決定する。
	9月	アンケート		事前調査として、作文意識についてのアンケートを実施
	10月	授業見学会② 研究会⑤	意見文を書く	意見文を書く活動(推敲段階)授業を見学・記録。手書き群とソフト群にわけ、効果を測定。授業後授業の検証と今後について話し合う。
	12月	研究会⑥		ここまでで作文のデータ入力完了。作文評価も完了。10月授業の結果の評価と、3学期に向け修正すべき点を検討。
05年	2月	授業見学会③ 研究会⑦	(未定)	授業見学と記録。場合によっては再調査。授業後研究の総括とまとめ方の方向などについて話し合う。
	3月	研究会⑧		本プロジェクトの成果および課題を明らかにし、論文としてまとめる。

※10月以降のスケジュールはいずれも予定

(2) 研究手順と手法

1) 使用するソフトウェアの特長

- ・名称は「ひらめきライター2」画面は図1の通り。
- ・構成ごとに枠に文が記入でき、順番を自由に入れ替えられる。
- ・話題ごとに文章作成のヒントが表示される。

2) 研究調査のための準備

- ・キーボード練習
- ・ひらめきライターへの馴化
- ・4月に課題作文を実施し、作文能力を調査
- ・9月に作文意識の調査をアンケートにより実施

3) 作文ソフト有効性の調査方法

- ・津島小学校5年1組(30名)と5年4組(30名)で実施。

- ・これまでの作文活動における表現内容や、作文意識の調査結果から、クラスをそれぞれ「手書き作文グループ」と「ひらめきライターグループ」に分け、同じテーマで作文を書く。
- ・書いた作文だけでなく、コミュニケーション全体をとらえるため、子どもたちの活動の様子、授業者の支援の様子を2台のカメラ(固定・移動)で記録する。
- ・手書き作文は後日データ入力し、同一視点で分析する。

4) 研究メンバー

- ・高本條治(上越教育大学助教授)
  - ・宗我部義則(お茶の水女子大学講師)
  - ・村岡明(ジャストシステム)
- ほか

3. これまでの成果

(1) 子どもたちの書く力の実態が明らかに

- ・手書きとパソコンの両方を使ったが、苦手な子ほどパソコンに向かう傾向が見られた。
- ・作文から、ひらめきライターのメモ枠とヒントが一定の効果を上げていることが見て取れ、本格調査の仮説とすることができた。

(2) 子どもたちの作文困難意識が明らかに

- ・調査研究実施の前に、子どもたちが作文に対して抱いている困難意識がどこにあり、それをどう考えているのか2学期の最初にアンケート調査した。
- ・「作文が得意か」という問いに対し、各クラスとも高い苦手意識を示した(図2)。
- ・このほか、困難なのは作文活動のどの部分なのか子細に調べ、そのデータの変容を見てソフトの有効性(あるいは無効性)を検証したい。

4. 研究で目指すべきゴール

(1) 子どもたちが学んだ実感をもてる

研究のための研究であってはならない。作文活動を行った子どもたちが、自ら「書けるようになった」「相手の気持ちが分かるようになった」といった内的実感を得ることを目指す。結果として、その方法論が明らかになる、といった形を目指す。

(2) ひらめきライターと表現活動の関係を明らかにする

使用したソフトウェアが、子どもたちの表現や思考を助ける(妨げない)道具となり得たかどうか、なり得たとすればどの部分か、なり得なかったとすればどの部分か、そのあたりを明らかにする。

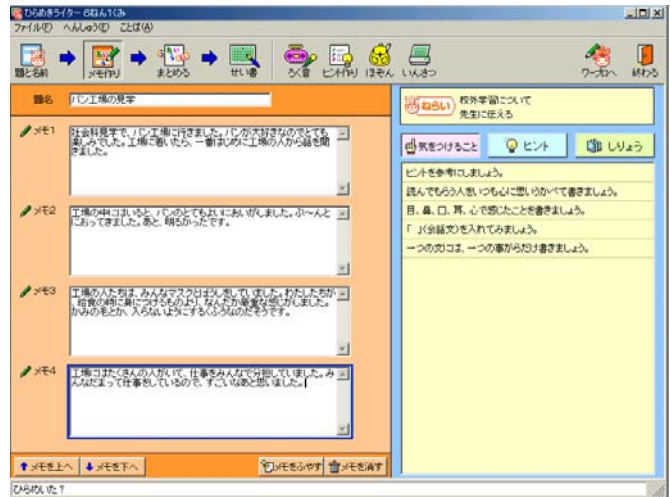
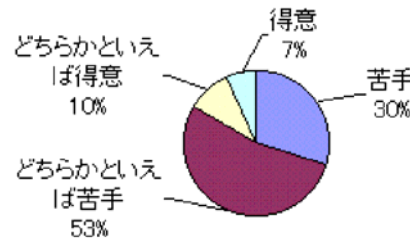


図1 ひらめきライター2

【5年1組】



【5年4組】

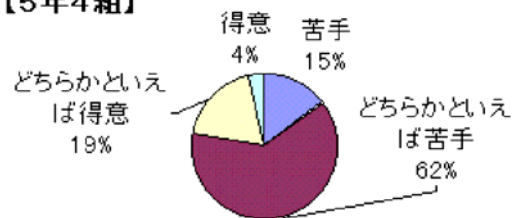


図2 作文の意識調査結果